東洋の秋

芥川龍之介

おれは日比谷公園を歩いてゐた。

空には薄雲が重なり合つて、地平(ちへい)に近い樹々(きゞ)の上だけ、僅(わづか)にほの青い色を残してゐる。そのせゐか秋の木(こ)の間(ま)の路は、まだ夕暮が来ない内に、砂も、石も、枯草も、しつとりと濡れてゐるらしい。いや、路の右左に枝をさしかはせた篠懸(すずかけ)にも、露に洗はれたやうな薄明りが、やはり黄色い葉の一枚毎(ごと)にかすかな陰影を交(まじ)へながら、懶(ものう)げに漂(ただよ)つてゐるのである。

おれは籐(とう)の杖を小脇にして、火の消えた葉巻を啣(くは)へながら、別に何処(どこ)へ行かうと云ふ当(あて)もなく、寂しい散歩を続けてゐた。

　そのうそ寒い路の上には、おれ以外に誰も歩いてゐない。路をさし挾(はさ)んだ篠懸(すずかけ)も、ひつそりと黄色い葉を垂らしてゐる。仄(ほの)かに霧の懸つてゐる行(ゆ)く手の樹々(きゞ)の間(あひだ)からは、唯、噴水のしぶく音が、百年の昔も変らないやうに、小止(をや)みないさざめきを送つて来る。その上今日(けふ)はどう云ふ訳か、公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海の如く、蕭条(せうでう)とした木立(こだち)の向うに静まり返つてしまつたらしい。――と思ふと鋭い鶴の声が、しめやかな噴水の響を圧して、遠い林の奥の池から、一二度高く空へ挙つた。

　おれは散歩を続けながらも、云ひやうのない疲労と

倦怠とが、重たくおれの心の上にのしかかつてゐるのを感じてゐた。寸刻も休みない売文（ばいぶん）生活！　おれはこの儘たつた一人（ひとり）、悩ましいおれの創作力の空（そら）に、空（むな）しく黄昏（たそがれ）の近づくのを待つてゐなければならないのであらうか。

　さう云ふ内にこの公園にも、次第に黄昏（たそがれ）が近づいて来た。おれの行（ゆ）く路の右左には、苔（こけ）の匂（にほひ）や落葉の匂が、混つた土の匂と一しよに、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間（こま）に腐つて行（ゆ）く花や果物の香（かを）りかも知れない。と思へば路ばたの水たまりの中にも、誰が摘んで捨てたのか、

青ざめた薔薇（ばら）の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。もしこの秋の匂の中に、困憊（こんぱい）を重ねたおれ自身を名残りなく浸（ひた）す事が出来たら――

おれは思はず足を止めた。

おれの行（ゆ）く手には二人（ふたり）の男が、静に竹箒（たかぼうき）を動かしながら、路上に明（あか）るく散り乱れた篠懸（すずかけ）の落葉を掃いてゐる。その鳥の巣のやうな髪と云ひ、殆（ほと）ど肌も蔽はない薄墨色（うすずみいろ）の破れ衣（ころも）と云ひ、或は又獣（けもの）にも紛（まが）ひさうな手足の爪の長さと云ひ、云ふまでもなく二人とも、この公園の掃除をする人夫（にんぷ）の類（たぐひ）とは思はれない。のみならず更に不思議な事には、おれが立つて見てゐる

間(あひだ)に、何処(どこ)からか飛んで来た鴉(からす)が二三羽、さつと大きな輪を描(ゑが)くと、黙然(もくねん)と箒を使つてゐる二人の肩や頭の上へ、先を争つて舞ひ下(さが)つた。が、二人は依然として、砂上に秋を撒(ま)き散らした篠懸の落葉を掃いてゐる。おれは徐(おもむろ)に踵(くびす)を返して、火の消えた葉巻を啣(くは)へながら、寂しい篠懸の間の路を元来た方(はう)へ歩き出した。が、おれの心の中には、今までの疲労と倦怠との代りに、何時(いつ)か静な悦びがしつとりと薄明(うすあか)く溢(あふ)れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべきおれの迷ひたるに過ぎない。寒山拾得(かんざんじつとく)は生きてゐる。永劫(えいごふ)の流転(るてん)を閲(けみ)しながらも、今日猶この公園の篠懸の落葉を掻い

てゐる。あの二人が生きてゐる限り、懐しい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐないのに違ひない。売文生活に疲れたおれをよみ返らせてくれる秋の夢は。

おれは籐の杖を小脇にした儘、気軽く口笛を吹き鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。「寒山拾得は生きてゐる」と、口の内に独り呟きながら。

（大正九年三月）

底本：「芥川龍之介作品集第二巻」昭和出版社
１９６５（昭和40）年12月20日発行
※平仮名の繰り返し記号に「ゞ」を用いる扱いは、底本通りとしました。
※底本の「ほの青い色を残してゐる。」「灰」《ほの》かに」「殆ど《ほとんど》」はそれぞれ、「ほの青い色を残してゐる。」「仄《ほの》かに」「殆《ほとん》ど」にあらためました。
※疑問点の確認にあたっては、「芥川龍之介全集　第六巻」岩波書店、１９９６（平成８）年４月８日発行を参照しました。
入力：j.utiyama

校正：かとうかおり
１９９９年１月27日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。